

## ユビキタス時代における CALL System

小張敬之  
(青山学院大学)

### 1. はじめに

2003年4月に最新の CALL System を備えたマルチメディア教室がオープンした。大学共通基盤システムの1つである、サイバー・キャンパスシステムを併用しながら、CaLabo EX を備えた最新型の CALL System ならびに携帯電話を利用した英語教育の実践を1年間行ってきた。「英語資格試験講座」「英語演習ゼミ」において、これらのシステムを利用しながら、学習ツールを利用した学び、on-line test、課題の提出、アンケート等、効率の良い授業をしてきた。ユビキタス時代における WBT を利用した教育の利点と弱点を考慮しながら、英語教育の分野における E-learning と CALL System に関して報告をする。

### 2. サイバー・キャンパスシステム

青山学院大学サイバー・キャンパスシステム(図1: AGUCCS)は、青山学院大学の AML Project と日本ユニシス株式会社が共同で開発した協調支援学習システムである。

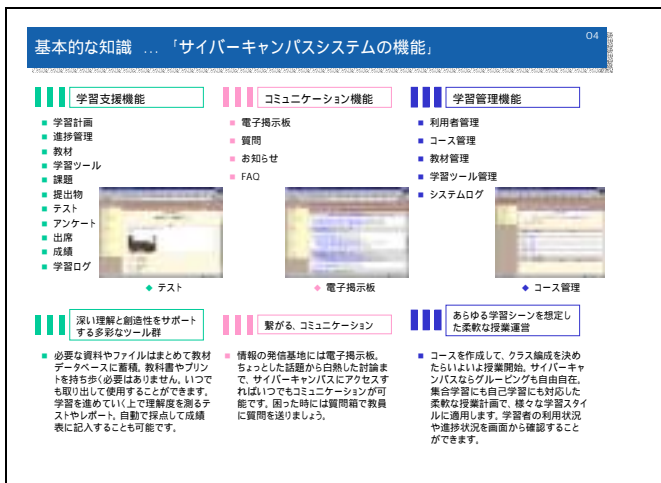


図1 CCS 機能(日本ユニシス作成)

CALL System in the Ubiquitous Age  
Hiroyuki Obari (Aoyama Gakuin University)

AGUCCS を利用すれば、ユビキタスの時代、学生は、ネットにつながさえすれば、授業の内容を見ることや、課題やアンケート、テスト、質問、学習ツールなど、授業中、また24時間、どこからでも利用できる。教師が教材グループや課題の項目から教材を配布して、学生がそこからダウンロードして資料を読む。学生は、さらにオンライン教材、ビデオ、CD-ROM 等を利用して内容を理解して、教材の内容を PowerPoint でまとめ、サイバー・キャンパスシステムを通して課題を提出し、クラスで発表する形式で授業に参加している。教師は、お知らせの項目や、掲示板を利用しては、随時授業で必要な情報を掲載し、学生の便宜を図っている。学習ツールの項目では、この授業に関連した、URLのアドレスと簡単な内容を教師が載せ、学生は、瞬時に情報を得て、「知の体系」を構築できる工夫がなされている。また、テスト機能もすぐれており、True False 問題、選択肢問題、自由記述式問題なども、音声とあわせて、リスニングテストを実施することも可能である。教師がアンケート機能を利用して学生の反応を見ては、授業に反映することも瞬時にできる。私の授業では、ICT と英語力を同時に向上させることを目的として、授業を計画している。そのために、学習者からの feedback を常に考慮しながら授業を行い、その結果を授業に反映させている。

### 3. CaLabo EX とサイバー・キャンパスの併用

CaLabo EX (New CALL System) とサイバー・キャンパスシステムの併用にも、「インターネットの光と影」があるごとく、利点と弱点がある。利点としては、ユビキタスに対応した教育が可能であり、英語とコンピュータを同時に学べる。つまり多量の情報をデジタルで簡単に処理するために、管理が容易、学習ツールが利用可能、授業の進捗状況が良く分かるなど、フルデジタル環境のもたらす恩恵は大きい。実際の授業での活用においても、学生が積極的に参加することが求められる。講義と自習が組み合

わさったインタラクティブな授業が展開でき、必然的に学生の学習スキルは上がってくる。また、同時にリスニングを重視した授業が可能であること。音声教材をサーバから引き出し自習形式で学習をさせながら、教師は学生の声をモニタリングし、個別に指導を行うことができる。さらにその音声教材を自宅に持ち帰らせ課題を与えることにより、デジタルデータによる継続学習が可能である。このようにフルデジタル環境での教育システムは、学生のITスキルアップや学習効率率は勿論であるが、教師としても効率的な授業を行うことができ、さらには本来の指導やその内容に集中することができる。弱点としては、コンピュータリテラシに関して、個人間の差が大きすぎるが故に、全員を同じようなレベルで指導が困難、時々システムの不具合により、授業が中断してしまい、コンピュータの利用に慣れるまで、かなりの負荷が個人、教員にかかりすぎ、その結果デジタルデバインドがおきてしまう。2つの併用利用のために、時々操作が混乱する等がある。しかし、CaLabo EX の持っている利点とサイバー・キャンパスシステムの利点を併用することにより、マルチメディア教材も十分に扱えるようになり、人間の感性(sense)と思考(thought)を同時に養える利点は大きい。

#### 4. サイバー・キャンパス(CCS)に関するアンケート

CCSを利用した授業の反応を学生から得るために、2002年度の後期1月、2003年4月からCCSとCaLabo EXを統合利用した前期授業に関して、前期の7月にいくつかのアンケート調査を実施した。特にCCSの利用に関して、またCCSとCaLabo EXのフルデジタルラボを併用して、学生がどのように英語、ICT、世界観を学んできたかを、自由記述式と5段階評価でアンケートを実施した結果から主な点に関して述べる。(詳細な報告は当日する予定。)

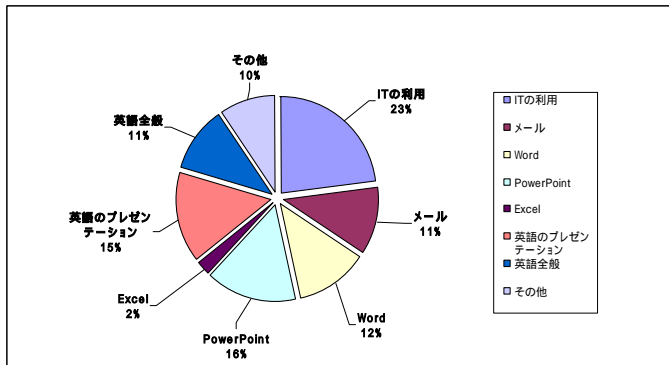


図2 CCS利用から何を学んだか、複数選択可能  
図2から、CCSを利用して学んだ事は、ITの利用(23%)、PowerPoint(16%)、MS Word(12%)、英語のプレゼンテーション(15%)、英語全般(11%)という結果から、IT 特に

PowerPoint のスキルアップにつながり、英語全般も学んだという結果が出ている。

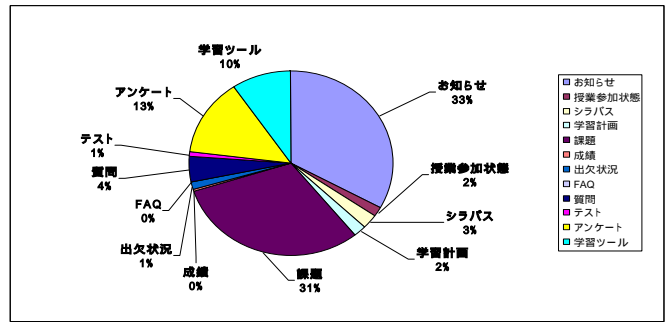


図3 頻繁にアクセスする項目

図3は、頻繁にアクセスする項目は、お知らせ(33%)、課題(31%)と最も多くこの2つのCCSの機能を学生は利用している。

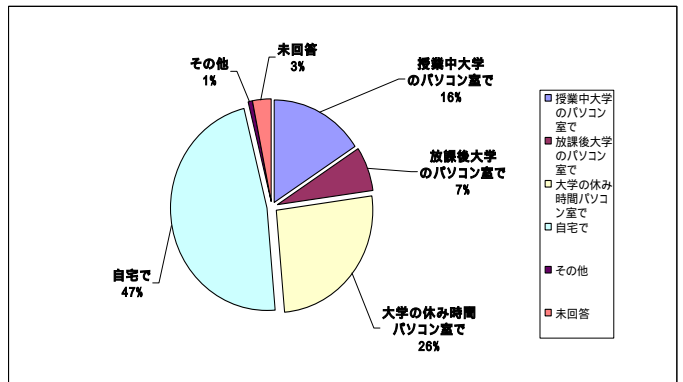


図4 CCSで一番役にたったと思う項目(複数選択可能)

図4は、一番役にたった項目は、お知らせ(34%)、課題(28%)、学習ツール(14%)とこれらの3つの項目を有効であると多くの学生が考えている。また、自由記述式アンケートからは、CCSの長所と短所の箇所でもふれたが、この授業を通して、多くの学生が、PowerPointのスキルを身につけ、英語でプレゼンテーションを行うことを学び、同時にICTにも少しずつ精通してきたと述べている。学習活動を通して、thinking network process(考える思考の過程)を構築し、創造的な、問題解決型の能力を培っていくような、指導技術と大学のカリキュラムが必要である。

(AML Project 研究の一部を掲載しました。)

#### 参考文献

小張敬之「インターネット利用の英語教育・世界観教育」  
青山インフォメーション・サイエンス Vol.30 No.1 2002  
pp21-49. 2003年1月  
古谷他『ITとESPアプローチによる専門英語教育-WBTとモバイルを活用した語学教育-』WG42 サイバーESP教育システム研究部会 青山学院大学総合研究所 特別プロジェクト AML II プロジェクト研究叢書第2巻第2号 2003年3月